

論文の内容の要旨

論文題目： 近代日本におけるアメリカ人医療宣教師の活動：
ミッション病院の事業とその協力者たち

氏名： 藤本 大士

本論文は、近代日本におけるアメリカ人医療宣教師の活動を、医学史およびミッション史の観点から分析したものである。これまでの医学史研究では、ドイツ人医師が日本の医学教育に大きな貢献をおこなったことが注目されてきた。それに対し、本論文は、アメリカ人医療宣教師を取り上げ、ドイツ人医師以外の西洋人医師が日本の医学に与えた影響を明らかにすることを目的とした。また、ミッション史における医療宣教師に関する先行研究は、個別の医療宣教師に着目したものが多く、近代日本において医療宣教師の果たした役割の全体像が明らかになっていなかった。そこで、本論文は、日本で活動したアメリカ人医療宣教師を可能な限り取り上げ、その役割の評価をおこなった。以上の分析に際して、アメリカの各教派・ミッションの刊行物（年報など）を主たる利用史料とした。

本論文では3つの課題を設定した。第一は、医学教育史の観点から、「日本における医学教育がドイツ医学に基づいて進められるなか、アメリカ人医療宣教師は医学教育にどの程度関与したか」という課題である。第二は、医療実践史の観点から、「アメリカ人医療宣教師は、ドイツ医学が支配的な日本において、なぜ活動を続けることができたのか」という課題である。第三は、ミッション史の観点から、「日本宣教におけるアメ

リカ人医療宣教師の役割は、時間の経過とともにどのように変化していったのか」という課題である。

本論文は 9 章から成る。最初の 3 つの章では、1859 年頃から 1900 年頃までを対象とし、日本において医療宣教がはじまり、拡大し、そして縮小する過程を描いた。その後の 4 つの章は、1880 年代半ばから医療宣教の変革が叫ばれるなか、医療宣教師たちがどのような戦略により、近代化しつつある日本の医学と差別化をはかったかを明らかにした。最後の 2 章において、第二次世界大戦後に発展していく医療宣教の活動を示した。各章の概要は以下の通りである。

第 1 章では、日本における医療宣教の最初期の歴史を記述した。1859 年に最初の医療宣教師が来日した頃、日本はいまだキリスト教禁制下にあった。そのため、宣教師はキリスト教を人々に直接説いてまわることができず、医療を通じた間接的な伝道が有用であると考えた。本章は、この時期に来日した 3 人の医療宣教師に注目し、彼らの横浜や長崎での活動を明らかにし、同時に、西洋医学教育を通じた伝道の効果について指摘した。

第 2 章では、1870 年代にやってきた医療宣教師の活動に注目した。明治維新後の日本では、医療宣教師にとって伝道を進めやすい環境が整っていった。1873 年にキリシタン禁制の高札が撤去されたこと、および、医療制度が西洋医学を重視する方針へ変更されたことに伴い、宣教師は日本人への接近が容易になり、日本人は西洋医学知識を外国人医師に求めるようになった。そのため、1870 年代は、日本における医療宣教が、全体を通じてもっとも成功をおさめた時期であるといえよう。本章は、アメリカ人医療宣教師が医学教育者として活躍し、同時に、「ドア・オープナー」として新たな宣教地を開拓していき、教会形成・信徒獲得に貢献したことを指摘した。

第 3 章では、1880 年代半ば頃から宣教師の間で医療宣教の意義が薄れ、19 世紀が終わるまでに多くの医療宣教師が医療宣教を中止していく様子を描いた。医療宣教の意義が弱まった理由としては、日本で西洋医学が急速に広まっていったことがあげられる。すなわち、公私立の医学校・医学塾で西洋医学を学んだ日本人医師が都市部を中心に増加し、患者にとって西洋医学が珍しいものではなくなっていった。その結果、アメリカ人医療宣教師たちはかつてのように日本人医師・医学生・患者を惹きつけることが難しくなっていく、医師としての活動を辞める者が増えていった。本章は、日本における医療宣教が難しくなるなか、医療宣教師たちの活動が変化していったことを明らかにした。

第 4 章では、1880 年代から 1890 年代における女性医療宣教師の活動を明らかにした。1880 年代頃から、西洋医学が日本に広まっていったものの、女性医療宣教師は、

いまだ日本人女性は西洋医学の恩恵を受けていないと指摘し、自らの活動の意義を示そうとした。本章は、医療宣教が困難な時期において、女性医療宣教師がミッション・スクールの校医などとして活躍したことを明らかにした。

第5章では、1880年代から1930年代までの宣教看護婦の活動、および、ミッションによる看護学校の活動に注目した。1880年代頃から、日本では西洋医学の意義が人々の間で認識されるようになっていったものの、専門職としての看護婦の意義はなかなか認知されなかった。そのため、その重要性を知らしめ、看護婦を養成すべく、宣教看護婦たちが来日するようになった。本章は、キリスト者による看護事業が成功するに至った理由を分析した。

第6章では、セブンスデー・アドベンチスト教会による医療宣教の特徴を明らかにした。セブンスデー・アドベンチスト教会は、1900年代はじめに最初の病院を神戸に設立し、1929年に東京衛生病院を設立した。同教会の規模は大きくなかったにもかかわらず、その医療施設、とくにそこでおこなわれる物理療法は好評を博した。本章は、セブンスデー・アドベンチスト教会がなぜそれほどまでの成功をおさめたのかを分析した。

第7章では、アメリカ聖公会の医療宣教師トイスラーが築地に設立した聖路加病院（のち、聖路加国際病院）に着目した。トイスラーもまた、日本において西洋医学が十分に発展していることを認めながらも、日本の医療には十分に整備されていない分野があると考えていた。本章は、聖路加病院が外国人への医療提供および公衆衛生事業を振興することで、日本のミッション病院のなかで最も成功をおさめることになったと指摘した。

第8章では、第7章に引き続き、聖路加病院に注目した。第二次世界大戦前はドイツ医学がいまだ支配的な日本において、十分な影響力をもつことができなかった聖路加病院は、戦後、アメリカ医学が振興されるなか、存在感を示していくことになる。その中心を担ったのが、トイスラーの遺志を継いだ橋本寛敏であった。本章は、日本でアメリカ医学が振興される中、聖路加病院および橋本寛敏が果たした役割を明らかにした。

第9章では、戦後、聖路加病院を含むミッション病院がいかに発展していくかを描いた。具体的には、戦前から医療宣教をおこなったセブンスデー・アドベンチスト教会に加え、戦後、新たに医療宣教をはじめたアメリカ南部バプテスト連盟およびアメリカ南長老教会の活動に注目した。戦後のミッション病院は、戦前のミッション病院の特徴を引き継ぎつつ、それぞれの病院が独自の長を前面に押し出していき、発展していくことになる。本章は、戦後のミッション病院の特徴として、チームとして医療宣教が進められるようになったことを、病院付き牧師（チャプレン）の台頭に注目し、明らかにした。

以上、本論文は、先行研究において個別に検討されることが多かった医療宣教師を、可能な限り網羅的に取り上げ、近代日本におけるアメリカ人医療宣教師の活動を包括的に描いた。そのような検討を通じ、提示していた3つの課題に対し、以下のように答えることができる。

まず、ミッション史の観点からの課題である「日本宣教におけるアメリカ人医療宣教師の役割は、時間の経過とともにどのように変化していったのか」に対しては、以下のように答えることができる。アメリカ人医療宣教師は、日本において宣教がはじまったばかりの頃は、西洋医学の優位を示すことで、ドア・オープナーとしての役割を果たした。しかし、1880年代頃から、日本において宣教が順調に進められるようになり、また、西洋医学が普及するようになると、その役割を、ドア・オープナーからキリスト教的人道主義の実践者に変えていった。そのため、日本に医療宣教師として留まり続けたのである。

次に、医学教育史の観点からの課題である「日本における医学教育がドイツ医学に基づいて進められるなか、アメリカ人医療宣教師は医学教育にどの程度関与したか」に対しては、以下のように答えることができる。1880年代半ば頃までは、日本ではまだドイツ医学が支配的になっていなかったため、アメリカ人医療宣教師は医学教育に関わる機会があった。しかし、1880年代半ば以降は、医学教育に関わることはほとんどなくなっていた。ただし、その後も、卒後医師への医学教育や、看護教育などに関与することがあり、とくに、キリスト教的人道主義の実践者としての看護婦養成に非常に熱心であった。

最後に、医療実践史の観点からの課題である「アメリカ人医療宣教師は、ドイツ医学が支配的な日本において、なぜ活動を続けることができたのか」に対しては、以下のように答えることができる。1880年代半ば以降、アメリカ人医療宣教師は日本人医師による西洋医学との差別化を進めていった。その際、日本ではまだ十分に発展していない分野に力を注ぐことで、自らの活動の優位を示そうとした。それが、慈善医療、物理療法、外国人患者への医療提供、公衆衛生事業などであった。いわば、アメリカ人医療宣教師は、日本における西洋医学を補完する役割を担うことで、自らの日本での活動を正当化し、それが人々に認められたために、医療宣教を長らく継続することができたのである。